京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ

松原好之

京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ

松原好之

集英社

京都よ、わが情念の
はるかな飛翔を支えよ

1980年1月10日　第1刷発行
1980年1月31日　第2刷発行

定　価　680円
著　者　松原　好之
発行者　堀内　末男

発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋 2—5—10
電話　東京　230—6361(出版部)
238—2781(販売部)

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止。落丁，乱丁の本はお取り替えします。

© 1980 Y. MATSUBARA
Printed in Japan
0093—772235—3041

京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ

装画　横手由男
装丁　菊地信義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なだらかなスロープを駆け上がり、わずかに吹きつけてくる風に額の汗がなごむのを感じると、あかね色の射光が遠い夕雲の輪郭を削りとりながら、つよく僕を貫いてくるように思われた。

よく晴れた春の一日が終わろうとしている。

汗ばんだ手で草を把み、運動靴を踏みしめてそれをもぎとると僕は、あかね色の空へ向けて一気に撒きちらした。

藪蔭の小径を通り、木立を抜け、賀茂川を見下ろす小さな頂のようなところに出る。そこはいつもの場所だった。晴れた日、僕が予備校の帰りにひとりできまって辿りつく神社の一角だった。

僕はいつものようにそこに坐り込み、夕空を眺めた。
川の向こう側に広がる街々を遍照しながらようやく陽が沈み始める。おびただしい朱色の光線が川波にちぎられて、夕せまる土堤脇の叢林に見え隠れしている。
夕雲の空から、あるいは川面から、僕の方へ射抜いてくる数限りない光が、無造作に生育したくろい喬木や灌木に遮られ、その深々とした闇の中にみごとに収斂していきつつある。
光と闇が、ふんだんに交錯しながら時を刻むひととき。
このひとときが与えるさらさらとした時の経過の肌触りを、僕は限りなく愛した。
夕雲が輪郭をとどめたまま、細長く広がり始め、青と朱と灰色に溶け合った遠方の空から、その輝きがゆっくりと収まり始める。
僕はむせかえる草いきれの中に体を埋め、ポケットから手紙を取り出すと、それを夕陽に向けて押し広げた。勢いを増した風に手紙ははたはたと翻り、夕陽はそのたびに、僕の目を直射していった。

拝啓。

おまえが浪人すると聞いてびっくりした次第。俺が受かったぐらいだから、当然おまえも受かっているものと思っていたが、意外であった。

一言で言うなら、ざまあみろだな。

ところでおまえ、何で京大なんか受けたんだ。ウチの高校はだいたい東大向けだから、そこそこの点数取ってりゃ、東大受けるべきだったのだ。

京都に余計な幻想を抱いてしまったのではないかな。

実際問題を考えてみろよ。京大としては、国から予算が東大ほどもらえないから、おまえの好きなロケット飛ばすというわけにもいかなくて、理論物理でもしこしことやってるほかないのだよ。

それで単発的にノーベル賞もらう学者が出てくるわけだが、おまえそこしか見ないで京大・物理にしたんじゃないだろうな。

俺と一緒に、理Ⅰからロケット班入ろうなと言ってたじゃないか。

例えばここに何千億という金があったら、今世界のどこかで餓死しつつある人々のどれだけかを救える。けれど敢えてそうせずに、それをどうでもよい、二度と帰っても来ないロケットを飛ばすのに使ってしまうことの、めちゃくちゃな不合理性を愛する、な

どということで、俺たちは一致してたんじゃないのか。あれは確か、おまえのオリジナルだったぜ。

ところで、暗記力だけで文I通った小林知ってるだろう。東大法学部の力は恐ろしいもんだぜ。あの顔で、女子大のとびきりハクイのに誘われたんだってさ、合ハイのあとで。

「あのう、父と一緒にホテルで食事をして頂けませんか」

小林もそんな馬鹿娘、やるだけやっちまえばいいのに、一人前に悩んじまってな。迷いに迷った挙句、断わって、そのあとトルコ通い、何のこっちゃ……。

おまえも悩める小林君のために、遠く洛陽の地より応援してやってくれ。

その点浪人はいいよな、ストイックに勉強に打ちこめて。ああ、何で俺は落ちなかったんだろ、なーんてな。

ともあれ、この一年何としても頑張って欲しい、と言いつつ、裏ではざまあみろと思っていることを告白して擱筆する。

空知誠殿

本田とよひこ

すでに、手紙の終わりの方の文字に、夕陽は十分な明るさを注いではくれなかった。大きく闇が育ち始めていたのだ。

僕はゴロゴロと転がるようにして杉の大樹のところまで行き、まわりにある柔らかい腐土を指で掬って、半袖の腕にこすりつけた。

土と皮膚の湿り気の部分だけが結び合い、秘かに僕の嗅覚をよぎっていった。

輝いていたものはすべて、刻々にその光沢を失い続ける。物象と僕との隔たり、僕からの視界。やがて全容を組み立て始めた闇の中に、そのひとつひとつが閉じ込められ、そしてやはり光を奪われた風が、それらを吹きなぶってゆくように思われた。

光のない風に新たな感覚を呼び醒まされた僕の腕は、あかあかとたぎり流れる血液を拒絶し、暮れなずむ虚空へ向けてはるかに差し出すことによって、真闇に同化しようと試みるのだった。

星屑の戯れすらここからは見えぬ。この僕だけの場。

木の群が整然と聳える神社の隅で、風に巻かれた僕の両腕は、すでに僕自身にも見え

なくなりつつあった。

あたりが完全に闇に没してから、僕は頂を降り、下宿に帰った。

夕食タイムはとうに済んでいて、誰もいない台所に僕の食事だけが残されてあった。

窓を開けた。

ざわめきの音量が少し上がる。闇それ自体が放っているざわめきだ。それは螢光灯の光が垂れこめる部屋に、吸い寄せられるようにして訪れ、不思議な諧調を織りなして、その冷え冷えと白い静寂を解きほぐしていった。

僕はテーブルの上に、土くれの付いた本田の手紙を置いた。

ああ、トウキョウの友人は、その文面に明るい哄笑を弾かせていたのだ。僕は遠くまで来過ぎはしなかったろうか。僕はこんな地の果てで、あと幾夜の孤独に耐えねばならないのだろうか。誇らかな僕の若さと自負が、はるかな異境で、人知れず最期を遂げつつある思いにかられた。

闇。

僕に授けられたあらゆる天分や歓喜が僕から遠ざかり、その遠ざかりゆく距離すら僕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にはわからない世界。

僕らが闇に見ることのできるのは、ただ記憶の像だけである。記憶こそ、不条理な時の触手によって闇の彼方から運ばれ、現在に結ばれる唯一の像にほかならない。

けれど記憶にかたちを与える光のさざめきが、どんなに鮮やかに光芒を放っても、それは遂に熱を持たない。そのことは、記憶というものがやはり虚像以上の何物でもないことを存分に証していた。

だが僕は、闇の中のその一条の記憶の光跡にのみ身を委ね、そこに抱かれながら、弱弱しく現在と未来を呪うしかなかったのだ。

「おまえ、顔に死相が出てるぜ。」

低い、ゆっくりとした声が聞こえた。僕は思わず窓を閉めた。けれど闇はすでに、声の主の立つ廊下の暗がりからその背後の無限の闇へと、音もなく広がりつつあったのだ。

闇はこのとき、「死」の轟音と一気に宥和し始めていた。

恐ろしかった。

声の主は闇を背に、かすかな笑いを浮かべている。

「死」を嘲弄すること、僕らの日常では、その行為はあの倦んだ陽光の下、乾いた緑の芝草の上で弾かせる若さと麗しさの誇示としてもたれていた。あるいは、僕らは陽光に酔いしれながら、酔うことのはにかみを「死」の語で中和していたのだ。

吹石！　その声の主は吹石だった。彼はいきなりそこにいた。

やがて彼は力強い手で僕の腕を引っ張ると、ねじ込むようにして自室に誘った。暗緑の縁どりのあるデスクライトからは、橙色の光が部屋の一隅に焦点している。それはベッドのまわりに置いてある緋色の寝具と相まって、妖気のような異様さを湛えていた。

吹石。

学園紛争が盛んだった僕の高校では、彼は最もセンセーショナルな存在だった。新聞部は、彼の在籍中はつねに校内における紛争の火種であり続け、発刊される新聞は彼のドグマで満たされ続けた。地元の鉄道に爆弾が仕掛けられた事件のときには、新聞部の部室も捜索の対象となったほどである。いわば彼は、伝説めく負のヒーローだった。

早熟な彼がどこかの前衛組織から持ち込んだと思われる独特の抑揚でアジテーションをぶち始めると、僕らはその伝説の人物の一言一句も聞き洩らすまいと、ある格別の緊張を持続して静まり返った。負のヒーローの放つアジ演説からは、凝集する言葉と拡散していく意味とが確認され、僕らはその不思議な跛行のイメージを僕らの思考の連続に繋ぎ留めようと懸命になるのだった。今から思えばそれは演説者の計量になる、一種の集団催眠の形態であったろう。

偶然、彼と予備校が同じで、下宿まで同じだと知ったとき、僕はある種の因縁を感じた。僕がかつて異性の誰に対しても抱いたことのないあの心躍る感慨を、吹石のアポリアに見出していた頃から、物見高い彼の聴衆たちから僕自身を截然と分け隔てる僕自らの気負いを認めていたのだ。僕らはこういうかたちで帰趨してゆく運命にあったのだ。

僕の中の無意識が携えている不思議な力は吹石と結合させるべく、僕をこの地に誘っていたに違いないのだ。僕はおそらく待ちわびていたのだ。

「俺は今、おまえを選んだ。わかるか。おまえは俺に選ばれたのだ。」

ドアの脇から奇妙な色と形状をした手製とおぼしい椅子が出され、僕はそれに腰かけ

させられた。そして彼は冷蔵庫の中から赤く透き通った瓶を取り出し、意外な手早さでグラスに注いで僕に渡した。

「グラスに死相を映してみるがいい。」

僕はこれらのことごとくを理解しようとは思わなかった。ただ僕は、今こそ僕だけに向けて成るべき言葉と意味とのおのおのの小宇宙が光速で分かたれようとするのを渾身で繋ぎ留めることができ、さらになお肉体を持つ一個の存在としての吹石に、対峙しきれるのだろうかと危惧した。

僕と吹石をとり結んできたあの黙契の糸が今こそ断たれ、さらに新たな「関係」へと、のぼりつめていくべき瞬間が訪れようとしているのだ。

僕は滅びるかも知れない。この思いは僕を急激に熱くした。

「儀式だ。ワインはおまえに生気を輸血してくれるだろう。場所は地下室。百人の下僕にかしずかれながら、時代は中世だ。」

吹石の言葉はそれだけだった。

呆然とする僕に、彼はその後ずっと黙ったままで、このやんごとなき〈対峙〉にもやはり全く無関心であるかのようだった。

一対一の対峙の際の、最も残酷な呼吸。この呼吸を間近に見て、僕は新しい意志を湧きたたせることは到底できなかった。

やがて彼によってドアが開かれ、僕は放り出されるように廊下に出た。

このときのワインが、僕にとって生まれて初めての酒であることに気づいたのは、しばらくしてからだった。

疼痛のようなものが頭の芯に消えないで残り、僕は不快で惨めだった。

苦い敗北の意識だった。それは闘う前から生理の奥底まで見透かされてしまった格好の、居直ることすらできぬ惨澹たる意識だった。

数学の問題集を広げる。以前解けた印のある問題ばかりを選んでやってみる。

数学的帰納法。問題は今度も解けるだろう。僕はその手順に沿って〈日常〉の中に安らいでいけるだろう。

n＝1のとき成立。n＝kのとき成立すれば、n＝k＋1のとき成立することを証明する。かかるときnはすべての自然数で成立。

〈日常〉への単純な安寧のためには、数学のもつ途方もない楽天性に沿いきることがい

ちばんたやすい方法だった。

数学自らの論理の恒常性にあけすけに依拠する楽天性。数値が均質に、等距離に無限へと向かっていくことを前提とする身勝手な楽天性。

けれど、そんな受験数学にも時々、安寧を破る罠が仕掛けられている。

ゼロ。例えばゼロだ。

数値の連続は時に、このゼロを避けて通過してゆく。ゼロのもたらす「無限」は、数値が均質に、等距離に向かってゆく「無限」とは異なるものだ。

あたかもそれは、「死と宥和した闇」の謂である。

ゼロを発見したといわれる古代インド人は智慧者というより、すばらしい勇者だったのではないだろうか。連続の中で立ち止まり、一挙に落下する危機感に苛(さいな)まれながら、認識の闇の深潭を下ってゆくこと、それは真に勇者のなせるわざだ。ゼロを最初に下った者は「死と宥和した闇」に全身で抗いながら、なお智慧の覚醒に敢然と刮目していたに違いないのだ。

僕もまた、と思った。

僕の中に、ごく平凡な勇気が舞い戻ってきた。いわばそれは「行為」への渇望だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com